

橋から見た都市

斗 鬼 正 一*

はじめに

人は、生物学的に、陸上で生息するように作られている動物である。摂食も水中ではできないし、何よりも魚のようにエラがなく、呼吸は鼻、口から空気を取り入れ、肺に大量の空気を溜めておくことはできないから、水中ではほんの短時間しか生存できない。

さらに、人は食物や水を入手する、他者と出会うなど、生きていく上で、移動することが不可欠であるが、歩行は陸上にほぼ限定されるし、体は一応水に浮くものの、本来泳ぐことはできない。それゆえ、川、池、湖、海などは、人が生きていくことは困難、危険な空間であり、移動先との間にそれらがある場合、移動は不可能となってしまう。

そこで作り出されたのが、水中に入ることなく、水の上を歩いて、あるいは列車、自動車等を用いて、渡ることのできる橋である。

要するに橋とは、人が生きていくことを阻害するものに対抗するために作り出された文化であり、物理的に人と人、人と空間を結ぶものなのである。

江戸・東京の場合も、その都市空間は、東京湾、多摩川、江戸川など、水に囲まれているから、そのままでは内外の移動は物理的に阻害されるし、水の都と呼ばれた都市空間の内部にも自然や人工の川、堀など多くの水路が存在するから、都市空間内部の移動のためにも多くの橋が架けられてきたのである。

それゆえ、橋は第一義的には、まず物理的に東

京の内外を結ぶものであるが、橋にはこうした物理的に人々の移動を可能にする、空間と空間を結ぶ道具であることを越えた、種々の意味が付与されてもいる。それゆえ本稿では、こうした物理的機能と意味的機能の双方に注目し、人にとって、都市にとって橋とは何なのか、さらには橋を通して見た都市とは、人とは何なのかを考えていくこととする。

第1章 内と外を結ぶ橋、隔てる橋

I. 都市の門としての橋

1. 日本橋

都市の内外を結ぶ橋は、それゆえに、都市の内外の境界を画し、内外を隔てる門としても用いられてきた。

中でも1603（慶長8）年架橋の日本橋（中央区）は、日本橋、京・三条大橋間の東海道を初めとする五街道の起点で、江戸と全国土との間の門に当たる橋であり、明治以降も日本国道路元標、東京市道路元標が置かれている。1911（明治44）年建設の現日本橋の橋桁には青銅の聖獣、獅子、麒麟が置かれているが、これも眠るとき目を閉じないと信じられている獅子は門や戸口の守り神であり、慈悲ある王を連れてくるとされる麒麟は繁栄と安全のシンボルとされてきたからである（荒俣1999）。またここには、関東大震災で築地に移転するまで、海に対する門ともいべき魚市場もあった。

2. 常磐橋

常磐橋門（千代田区）は、將軍家光の頃まで浅草口、追手口と呼ばれた江戸五口のの一つで、文字

通り江戸城の門として枡形があり、1590（天正18）年架橋の橋自体、浅草口橋とも呼ばれていた。現在の常磐橋は1877（明治10）年に、常磐橋門の枡形の石を用いて架け替えたものである。

3. 勝鬨橋

勝鬨橋（中央区）は、1905（明治38）年、日露戦争の旅順陥落を祝って作られた「かちどきの渡し」に由来し、1933（昭和8）年着工、1940（昭和15）年に完成している。1940年は神武天皇即位後2600年とされ、「紀元2600年記念日本万国博覧会」と、第12回東京オリンピックの開催が予定された。月島（中央区）がオリンピック主会場と目され、山下町（横浜市中区）とともに万博会場に予定されたのは晴海町（中央区）、豊洲（江東区）だったから、勝鬨橋は会場へのメインゲート、船での来場者のための歓迎門と位置づけられていた。加えて周辺には東雲（江東区）に飛行場があり、現在晴海トリトンスクエアのある月島4号地には、東京市庁移転計画が進められていた。大陸への進出と国威発揚という時代背景の中、勝鬨橋は、国際港も計画され、世界へつながる新天地にそびえる帝都の門だったのである（伊藤1989）。

結果的には、日中戦争激化、軍部の反対、国際的孤立などで、1938（昭和13）年に万博、オリンピックとも中止、市庁移転も実現しなかったが、大型船の通航にあわせて開閉する特徴的姿とも相俟って、永代橋に代わる帝都の門としての役割を担うこととなった。

戦後高度成長期には、橋の持つシンボル性などは軽視され、交通量増加により開閉されなくなり、加えて永代橋との間に佃大橋がかけられたために、首都の門としての機能はかなり失われている。

4. 永代橋

水上交通が重要だった鉄道以前の時代に、水上から見た都市の門として作られたのが永代橋（中央区、江東区）で、帝都を代表する川、隅田川に屹立する水路の帝都の門と意識されていた。

5. 鉄道の門、新橋駅・ハツ山橋

鉄道の時代に入っても、最初のターミナル新橋駅（港区）は、文字通り東海道の架かる新橋のそばに作られ、1927（昭和2）年に至っても、新橋を過ぎると帝都らしい（高浜1999）と言われたように、帝都の門の役割を果たしていた。実際、新橋駅舎は、二つの建物の間を通してホームに出入りする形であり、門が意識されたデザインだったのである。

また東海道のハツ山橋（港区、品川区）は、新橋―横浜間の鉄道建設時にハツ山を切り開いたため、日本初の跨線橋として作られたタイドアーチ橋である。凝ったデザインが帝都の門であることを示していたが、上り列車が品川駅到着直前に通過する切り通しの上に架かり、陸路でも東海道品川宿の北端で、実際、明治初期には東京府と品川県の府県境、後には東京市芝区と荏原郡品川町の境だった。

1954（昭和29）年の映画『ゴジラ』第一作でも、ゴジラの東京上陸地点として選ばれている。

6. 六郷橋

江戸時代東海道の多摩川には橋が無かったが、京浜国道には六郷橋（大田区、川崎市）が架けられた。1925（大正14）年架橋で1984（昭和59）年まで使用された旧六郷橋はタイドアーチ橋で、陸路の帝都の南門として、両端がアーチ形の橋門になっている。

7. 白髭橋

東京市と北豊島郡南千住町を結ぶ最初の白髭橋（台東区、墨田区）は永代橋と似ており、北からの水路で、千住大橋の次に現れる第二の帝都の門を意識したのではないと言われる（伊東1989）。

8. 千住大橋

日光街道では、旅人は音無川の三ノ輪橋（台東区、荒川区）を渡るとき、江戸府内と府外の境界を感じたとも言われるが（大石2003）、隅田川でもっとも古く、1594（文祿3）年に架橋された日光街道千住大橋（荒川区、足立区）は、江戸に入

る関門と意識されてきた。松尾芭蕉が1689（元禄2）年、ここから「奥の細道」へと旅立ったことは良く知られている。その後も陸路の帝都の北門とされ、現在上り線に使われている1927（昭和2）年架橋の橋も、門を意識した桁が頭上に通り、大きなプレートに「大橋」と書かれている。

この橋は現在でも、地域の人々によって、足立区の玄関口として認識されている。

II. 都市の内部を結び、隔てる橋

1. 「川向こう」

隅田川には当初千住大橋しかなかったが、明暦の大火での反省と、江戸市街地の拡張を目的として、1659（万治2）年、隅田川下流に両国橋（中央区、墨田区）が架けられた。初めは単に大橋と呼ばれたが、1693（元禄6）年の新大橋架橋後、隅田川が武蔵、下総両国の境界であったことから二州橋とされ、のち両国橋と改められた。

こうして隅田川の東側は江戸と結ばれはしたものの、他方で「川向こう」というある種差別的な呼び方をされてきた。「橋を渡って両国・深川。そこはもう江戸じゃあねえ」「江戸で生きて行けねえ脛に傷持つ男と女が辿り着くのが、その川向こう」（大野2002）とされたのであり、橋は深川界限への江戸庶民の差別感を象徴するものでもあった。

2. 宿場を分ける品川橋

品川区北品川、南品川は、間に目黒川が流れ、品川橋が境界になっているが、双方合わせて東海道第一の宿場品川宿だった地域である。また北品川の鎮守品川神社の「北の天王祭」、南品川の荏原神社の「南の天王祭」は、合わせて品川天王祭と呼ばれ、『東都歳時記』（斉藤1928）にも、「両社の神輿中の橋にて行きあい、御旅所南北へ分かる」と記されている。ところが他方で、北には本陣があり、高級な旅籠が多く、他方南は遊女も安く、「品川で橋を渡るはしわい奴」という川柳が残る程で、南は格下と見られていた。また品川神社は將軍家光奉納の神輿に天下一瞥の面を付けるのに対し、荏原神社の面は、農民が海で拾ったも

ので、江戸時代には、神輿が品川橋の上で出会った場合、南は北が通り過ぎるまで平伏して待たねばならなかった、という風に北高南低の対立意識があった。

しかし明治になると、橋の上で双方の神輿を下ろし、北の神輿に付けられた赤面、南の神輿の黒面を交換する「面取っかえ」が行われるようになり、今日では、互いの祭りに参加する人も多く、共に品川拍子を奏し、横棒担ぎの神輿渡御が行われている。品川橋は、対立しかつ連帯する二つの地域を媒介する場となっているのである。

3. 橋のたもとの髪結い床屋

江戸時代の床屋は、髪結い床、浮世床などと呼ばれ、居職と出職がいたが、居職は公道の主要な橋のたもとや辻の角に店を構え、職人の多くは岡引きの下で働く下引きで、橋の掃除をするだけでなく、通行人を見張り、罪人の髪、髭を剃る義務もあった。当時月代は剃ることが義務づけられ、剃っていないと犯罪者扱いされたし、住む町の床屋にしか行けなかった。床屋は民衆を監視する重要な役割が期待されていたのである（鈴木2006）。江戸は多くの町々からなり、橋が多く町を結んでいたが、他方、町々は木戸で仕切られ、夜間は閉じられ、橋は移動を監視することによって、町々をさらに分断する施設でもあったのである。

4. 外国人居留地

日米修好通商条約によって、江戸にも外国人のための居留地を作ることとなり、1868（明治元）年、隅田川河口の武家地であった築地明石町（中央区）に築地居留地が完成した。1899（明治32）年の条約改正に伴い廃止されるまで、公使館、教会、ミッションスクール、病院、ホテル、レストラン、商社など西洋館が並び、外国人が暮らす西洋文化の窓口で、鏑木清方が「築地と木挽町とは常に何ものか清新な気流が感じられる」（鏑木2001）と述べているように、文明開化の街、東京の中の異国だった。

こうした外国人居留地の立地は、周囲を堀に囲われ、多くの堀を橋で渡り、最後には南飯田町、

新湊5丁目、9丁目からの橋、そして本湊町からの2つの橋によって、結ばれ、他方で隔てられていた。江戸幕府によって作られた築地ホテルも、同様に本願寺橋ほか6つの橋で、周囲と結ばれ、隔てられていた。

橋は、外国人たちが一方で交流したい憧れの対象だが、他方で隔離すべき畏れの対象でもあることを、目に見える形で表現していたといえよう。

5. 「日本人」作りを目指した明治政府の架橋

明治政府は明治の初め、不燃化都市建設の一環として、九州の石工を呼び伝統的な手法で東京市内に石造アーチ橋をつくらせた。石橋は東京では珍しく、1873（明治6）年架橋の万世橋（千代田区）、1875（明治8）年の京橋、江戸橋（中央区）などの眼鏡橋が錦絵の題材に取り上げられたが、さらに重要なことは、万世橋などの建設に使用したのが見附の石垣の石だったことである。幕府によって築かれた見附を破壊し頑丈な橋を架けたことは、閉鎖的都市からの解放（初田1994）を意味することであり万世橋は閉ざされ、隔てられた封建都市から、開かれた、結ばれた近代都市への転向をもっとも良く象徴しているのである。

第2章 超自然、異界との境界としての橋

I. 他界との境界としての橋

1. 両国橋

1657（明暦3）年の大火以後、両国橋詰の回向院（墨田区）には、小塚原の回向院（荒川区）に葬られた死刑囚を除き、江戸が生み出すすべての無縁仏が葬られるようになった。洪水のために隅田川に漂う水死者も両国橋あたりで引き揚げられ、回向院に葬られたし、牢死者も葬られた（司馬1995）。

両国には、現在も国技館があり大相撲が行われているが、江戸時代に回向院が無縁仏の供養を兼ねて勧進相撲を開催していたのは、力士が生きた仁王として江戸を守り、不幸な死者を慰め、冥府の世界から両国橋を渡って侵入しようとする邪霊を踏み破る役割を期待されていたからだという

（荒俣1999）。

また両国橋東詰は、江戸時代、大山詣の人々が出発に際して水垢離を取った場所である。大山（神奈川県伊勢原市、厚木市、秦野市）は、特徴のある三角形で江戸からも見えたが、別名雨降（あふり）山ともいわれ、農民には雨乞いの、漁民には大漁祈願の対象とされた霊山で、修験者の行場とされ、先祖の霊の行き着く山とも考えられていた他界である。近世には御師の活躍で大山信仰が発展し、関東一円で大山詣が行われ、山頂まで登拝が許された旧暦6月27日～月末の初山、7月13～17日の盆山はことに賑わった。江戸各町の講社が大きな木刀を持って厚木街道を大山に向かうに際し、水垢離をとるべき所として選ばれたのが両国橋だった（栗本1984）。

両国は、かつては武蔵、下総の国境で、隅田川左岸の開発に伴って、江戸に組み込まれていった文字通りの境界的空間で、国境に架けられた両国橋は邪霊の棲む冥界、異界、他界に通じると考えられ、防御の仕掛けが置かれるべき場所だった。境の川とされた大川（隅田川）の両国橋を渡ると、とりあえず他界に近づける、と考えられていたのである（栗本1984）。

また同じ隅田川上流の厩橋（台東区、墨田区）付近の御厩の渡しも、明暦の大火の犠牲者をこの付近から回向院へ運んだため、三途の渡しと呼ばれていた。

2. 吾妻橋

このように、隅田川東岸は他界と意識されていたために、生と死の境を感じた人々が、吸い寄せられた。すなわち黙阿弥の『三人吉三』（河竹1984）には、盗賊だったが改心し、隅田川に浮いた水死者を引き揚げて埋葬するようになり、土左衛門伝吉と呼ばれた男が登場する。夢野久作も、「隅田川は昔から身投げが絶えぬ。都会生活に揉まれて、一種の神経衰弱に陥った人間が、かの広い、寂しい、淀みなく流るる水を見ると、吸い込まれるような気持ちになるのは無理もないであろう」と書いている。隅田川は昔から堕胎児、生まれてから殺した子、子どもが捨てられるところ

もあったのである（夢野 1979）。

とりわけ身投げという吾妻橋（台東区、墨田区）で、落語でも身投げの場として登場するのは決まって吾妻橋である（佐藤 1988, 司馬 1995）。

3. 泪 橋

日光街道を最初の宿場千住に向かうと、南千住の手前の小塚原にお仕置場（処刑場）があった。その手前にあった橋が泪橋（台東区、荒川区）である。江戸から送られた罪人たちはここで家族、親類縁者と涙の別れをして、この橋を渡って処刑場へと向かった。

東海道でも同様に、第一の宿場品川宿を過ぎ、立会川の泪橋（品川区）を渡ると鈴ヶ森の刑場である。

これは、罪人たちを水、橋を越えて江戸の都市空間から追放し、処刑することによって、江戸の都市空間が生者の空間、他方橋の向こうは死者の空間として峻別されていることを意味するのである。

第 3 章 異界との交信

I. 橋で起こる怪異

1. 七不思議

七不思議は水辺に多いが、特に集中したのが荒川、隅田川の水辺、とりわけ橋である（小松 1988）。本所七不思議にはよく知られた「おいてけ堀」の他に、本所藤代町（墨田区）から両国橋広小路に渡る駒留橋（墨田区）の下を流れる隅田川入堀では葦の葉が一方だけしか生えないという「片葉の葦」がある。千住七不思議には「千住大橋と大亀」、千住大橋の大緋鯉、八丁堀七不思議にも「地獄の中の地藏橋」がある。

2. 淀 橋

神田川の新宿、中野区境に架かる淀橋は、中野長者が財産を密かに埋めさせた下男を、帰路に秘密が漏れないよう川に投げ込んだ場所で、その祟りによって娘が蛇と化したという。姿が見えなくなったので姿見ずの橋、面影橋と呼ばれ、嫁入り

行列は渡らない不吉な橋だった。後に徳川家光が不吉な橋の名を、大阪の淀川にちなんで変えさせたとされる。この橋を嫁入り行列が渡れるようになったのは、1913（大正 2）年の浄橋祭以後である（田中 1999）。

3. 九頭龍橋

千川用水の九頭龍橋（練馬区）は、嫁が里帰りの帰りに渡ろうとしたところ橋がなかった。まもなくその嫁は死んだが、以後も渡った人が死んだり狂ったりした。これは太田道灌の命を狙ったが果たせなかった渡辺氏が龍神になり祟ったためといわれ、弁天を勧請すると収まったが、結婚、祝儀の時は近年まで渡らなかったという（田中 1999）。

II. 橋で他界からの声を聞く

1. 橋 占

橋占とは、橋の袂に立って、往来する人の言葉を聞き、それによって自分の願い事や気に掛かることの吉凶、成否を判断したりする占いである。

橋占の名所は、他界から靈魂を戻した橋とされる平安京一条戻り橋で、陰陽師安倍晴明が橋の下に置いた式神を用いて橋占を行い、『源平盛衰記』（巻十、中宮御産事）にも、「一条堀戻り橋にて橋より東の爪に車を立てさせ給ひて、橋占をぞ問ひ給ふ」とあり、安徳天皇が生まれる際に、二位殿が戻り橋で橋占を行い、天皇の将来を 12 人の童部が走りながら唱えた言葉で占った記事がある（中村 2005）。

神田川の面影橋（新宿区、豊島区）、先述の姿見の橋（淀橋）も姿見の池、姿見の井戸などと同様に、水に影を映してその影によって占いを行った橋であるともいわれる。

また、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（古今集）で知られるように、在原業平が都に残した妻が元気かどうかを都鳥に言問わんとしたのも言問橋（台東区、墨田区）の辺りである。

2. 一石橋、赤羽橋の迷子しるべ石

日本橋の二つ西側にかかる一石橋（中央区）に

は、「満よい子（迷子）の志るべ」という石柱が残されている。これは迷子になった子どもを探すために1857（安政4）年に立てられたもので、柱の右側面は「志らする方」、左側面は「たづぬる方」とされ、情報提供を求めたのである。

「迷子しるべ石」は1842（天保13）年の湯島天神（文京区）開帳の混雑に際して、「奇縁求人石」として企画されたのが始まりで、一石橋、浅草寺にも建てられた。明治初年には一石橋、赤羽橋（港区）、湯島天神前、浅草仲見世前（台東区）に、さらに両国橋、神田万世橋際（千代田区）、芝大明神（港区）にも建てられていた。

これは無論迷子探しのための掲示板、伝言板ではあるが、迷子は神隠しといわれるように異界との関係が深いため、その情報を求める場として異界との境界である橋が選ばれるのである。

3. 橋尽くし

三島由紀夫の『橋尽くし』（三島1996）は、花街の4人の女性達が陰暦8月15日の夜に、築地（中央区）の7つの橋を渡りきるまで口をきかない、話し掛けられてもいけない、同じ道を2度歩かないという約束で街を歩いた成り行きを描いた小説である。7つの橋を無事に渡り終えれば願掛けが叶うとされており、橋は人の世ではどうにもならない、特別な力を与えてもらえる場と考えられている。

橋はこの世の境界であるため、他界、冥界という見えざる世界が露頭する。それゆえ橋は、人知を越えたことが起こる場所、未来の出来事を見ることが出来る場所、異界からの託宣を聞ける場所などとされてきた、というわけである。

Ⅲ. 橋で元気をもらう

江戸・東京でも遊興空間は水辺に集中していたから、遊興空間に入るには、そうした他界、異界と現世を隔てる橋を渡ることになる。さらに、架橋場所は限られていたから、陸上交通と水上交通の結節点となる橋とたもとの橋詰広場を含む橋空間自体が、もっとも人の混雑する場所の一つとなり、江戸以来都市の賑わいの集中する地点だっ

た。それゆえ、市が立ち、旅芸人が大道芸を演じ、茶屋が並ぶ歓楽街が成立したのである（陣内1993）。

1. 吉原

江戸文化の発信地でもあった遊郭吉原は、別名「北州」「北国（ほっこく）」とも呼ばれ、アリンス言葉など、独自の文化が存在する異国だったが、ここも橋を越えた向こう側だった。すなわち吉原の周囲にはお歯黒溝が巡らされ、江戸の人々は猪牙船で隅田川、山谷堀を遡り、今戸橋あたりで下船して日本堤の土手八丁をやってくる。衣紋坂をおりると吉原の入口見返り柳、五十間道を行くと大門があり、幅五間のお歯黒溝の橋を渡って入る異国だったのである。

2. 両国橋詰

明暦の大火を教訓として、両国橋架橋にあたり1703（元禄16）年、橋詰に火除地が設けられた。当初は防災が目的だったが、広小路が出来上がってみるとヨーロッパの都市広場のごとく活用され、江戸最大の盛り場となって賑わい、江戸文化を育てる大きな役割を果たした（司馬1995）。

すなわち、水の大動脈隅田川と下総、武蔵を結ぶ陸路の結節点であり、開放的な水辺の風光明媚な地で、神田川を越えた北の奥に浅草寺、渡った東に回向院という人気の宗教施設があり、盛り場として最高の条件を満たす場所だったから、河岸沿いに料亭、船宿がひしめき、橋詰の水際には茶屋、内側には見世物、浄瑠璃、芝居、講釈などの小屋が並ぶ迷路のような空間となった。

とりわけいかがわしかったのが川向こうの東側で、好色物、因果物、イカサマ物、珍妙な見世物など大がかりな興業が行われ、回向院前には俗に金猫、銀猫と呼ばれる私娼の宿もあって（栗本1984）、永代橋西詰、御厨河岸などの水辺同様に、毎晩夜鷹が出没する闇の空間が形成されていた（浅野1999）。

江戸の人々にとっては、武蔵、下総国境の隅田川にかかる両国橋を渡ってこそその歓楽だったわけである。

3. 深川, 向島

江戸中期に新興盛り場として登場したのも、両国橋で隅田川を越えた川向こうの深川で、江戸後期には、吉原に繰り出す前に芸妓をあげて酒宴を張る大尽遊びも行われるようになったという（神崎 1993）。

4. 柳橋, 新橋

神田川が隅田川に合流する地点に、元禄の下町大火後の 1698（元禄 11）年に架けられたのが柳橋である。大川に面して料亭福井楼、生稻、大常磐、柳橋を渡ると亀清、柳光亭、そして待合、芸者屋、吉原に出かける人々が出発する船宿も並んでいた。

新橋の料亭街も、銀座京橋が吉原に通う船の船着き場だったために、近辺の船宿がもとになってできたものであるが（サイデンスティッカー 1986）、明治以降政財界人を中心に柳橋をしのいで栄えてきた。

5. 現代の橋向こう, お台場

東京名所となったお台場（港区）も、都心から海上の橋を渡って到達する島である。1993（平成 5）年完成のこの橋は、レインボーブリッジと名づけられているが、虹は異界と現界を結ぶ橋を意味するものであり、混沌の大都会から虹を渡った橋向こうの、外国を感じさせる異界が、自由の女神像、ヨーロッパ風のショッピング街ビーナスフォートから江戸の湯屋を再現した温泉まで備えた巨大なアミューズメントエリアとなり、全国から観光客を集めているというわけである。

6. 芝 浦

1991（平成 3）年、芝浦 1 丁目（港区）に英国ジュリアナが outlet したジュリアナ東京は、ワンレン・ボディコンのお立ち台ギャルで全国的に知られたディスコである。バイエリア人気に火をつけた存在で、運河に囲まれた倉庫街にあり、田町駅からわかりにくい道を運河に沿って進み、鹿島橋を渡ってようやく到着する。橋を隔てた別世界感覚が人気の一因といわれている。

7. 妙見島

江戸川区東葛西 3 丁目の妙見島は、江戸川の中洲にある 23 区唯一の有人島である。江戸川に架かる浦安橋の途中から車道、階段で降りると、廃車置き場、工場、廃墟に近いアパートなどが並ぶ寂しい、うらぶれた雰囲気のある島だが、地ビールを醸造するヨットクラブ、レストランがあり、橋から島に下りた所にはラブホテルもある。まさに知る人ぞ知る橋向こうの別世界である。

8. 東京ディズニーリゾート

東京ディズニーリゾートは日本にありながら日本ではない。「夢と魔法の王国」東京ディズニーランドにはウエスタンランド、アドベンチャーランド、ワールドバザールなどが、ディズニーシーにはアラビアンコースト、マーメイドラグーン、ミステリアスアイランド、メディテレーニアンハーバーなどがあり、アメリカが、世界が、うつされている。

東京ディズニーリゾートという名称とは裏腹に、千葉県浦安市の埋め立て地に立地しており、東京からは必ず橋を渡らなければ行けない。JR 京葉線の場合、荒川を越え、葛西臨海公園駅を出ると都県境の旧江戸川鉄橋を渡って舞浜駅に到着する。千葉からの上りでも境川を越え、見明川を渡る。さらには舞浜駅からディズニーランドに入るためにも、長い歩道橋を渡る。

車の場合でも、首都高速湾岸線、国道 357 号線（湾岸道路）とともに、旧江戸川舞浜大橋を渡し、その前にも都心からは、荒川河口橋など多くの橋を渡る。千葉市からも同様に多くの橋を渡し、最後は見明川の弁天橋を渡る。JR 京葉線も首都高速も、国道も、必ず橋を渡らないと行くことができない。文字通り橋の向こうの異界なのである。

他にも豊島園（練馬区）は中央を石神井川が流れ、入園するには正門に入ってすぐに橋を渡し、平和島（大田区）も埋立地で、大森海岸の浜辺だったところがそのまま競艇のプールになっており、行くには必ず橋を渡る。さらにサンシャインシティ（豊島区）のナムコナンジャタウンのキャッチフレーズは「ビルの中なのに宝島!? 冒険空間ナン

ジャタウン!!」である。

9. お化け屋敷

とりわけ夏になると、デックス東京ビーチ（港区）、ナンジャタウン、東京ドームシティ（文京区）、浅草花やしき（台東区）など、多くの遊園地にお化け屋敷が開設される。入り口には、寺社門前同様に、橋が架けられている場合が多く、入場者にとっては、賽の河原の橋を渡り他界に入る疑似体験の場となっている。日常生活では味わえない危険、不安、恐怖などに遭遇し、橋を渡って現世に帰り、リフレッシュして日常生活に復帰する、という仕組みなのである。

おわりに

1. 動物としてのヒトはまずは、他の個体とは異なった一個体として存在する。ただしヒトは一個体では生きることができないから、他個体との連帯が必要となる。そうして作られた家族、地域社会といったコミュニティもまた、他とは異なったコミュニティとして存在するが、他方で、他のコミュニティとの連帯が必要である。すなわち我々の生活する社会とは、一方で他者に対立しつつ、他方で連帯する、という矛盾した原理に基づいて組み立てられている、というわけである。

ところでこれを、空間とのかかわりで見ていくならば、まずは一個体としての人のアイデンティティは、身体的非連続性、すなわち、自己と他者の身体が別々であり、境界が明確であることによって、担保される。同様に、個別の家族のアイデンティティは、他の家族とは別個の家で生活していることによって確認されるし、個別の地域社会のアイデンティティも、他地域とは別の空間を占めることで確認される。すなわち空間の非連続性が必要というわけである。

ただし他方で、個人も、家族も、地域社会も、他の個体、家族、地域社会との交流、連帯なしには存続できないから、空間もまた一方で非連続化されながら、他方で連続化する必要がある、ということになる。

2. こうして考えたとき、水中、水上では生きていくことも、移動することもできない人という動物が作り出した橋は、移動の必要性のある空間との間に存在する阻害要因である水に対する対抗手段として作り出された文化、として理解することができる。連帯を必要とする人々の空間との間の交通機能を与えられた道具、というわけであるが、他方、移動の必要のない、あるいはむしろ移動を阻止し、境界を明確化すべき空間、すなわち連帯する必要がない、あるいは対立を明確にするべき人々の空間との間には、橋は架けない。あるいは架けられた橋自体が、逆に門として境界を明確化するために用いられている。

要するに橋は、結びつつ隔てているわけで、交通機能を持ち、かつ、人々の連帯と対立を、コミュニティを、自己確認するという社会的機能をも持っている、というわけである。

3. 人は自然の支配する空間では生きていくことができないから、自然を排除し、自然から切り離され、文化によって作り上げられたコスモスとしての都市空間を作る必要がある。さらに人は、魑魅魍魎、鬼、怨霊などの跋扈する超自然のカオスが支配する空間でもまた、生きていくことはできないから、都市空間と超自然の支配する空間との境界を明確化し、都市空間からそれらを排除しなければならない。さらにそうして作り上げた都市空間内部では、人々自身が、性的行動を行い、暴力をふるい、そして死ぬといった、動物であるが故のカオスを発生させることとなるが、これもまた統制、排除する必要がある。

それゆえ都市は、存在し続けるためには、自然、超自然の支配するカオスの空間との間に境界を明確化し、内部で発生する自然、超自然によるカオスを常に排除し続けることが必要となるのであり、橋は、コスモスとしての都市空間とカオスの空間を峻別する境界線、門としての機能を与えられているわけである。

4. こうしてカオスを排除して、確保、維持されるのが都市空間というコスモスであるが、他方

で、人は自然、超自然のカオスの力を無視しては生きていくことはできない。それは、自ら作り出した文化にがんじがらめになることにより、人々自身が徐々に動物としての活力を枯渇させていくからであるし、文化、コスモスも万能ではなく、文化の力をもってしてもすべてに対抗できるわけではないからである。

そこで動物としての自らを再活性化するためには、文化による統制から一時逸脱することが必要となり、文化の力を超えたものへの対抗手段としてもカオスの力を取り入れることが必要となる。橋詰空間が歓楽の場とされ、迷子探しから占いまで、カオスの世界からの託宣を聞ける場としても利用されるように、その際利用されるのが他界、異界に通じ、境界をなす橋なのである。

橋は境界を明確化し、排除、統制したはずの自然、超自然、他界、すなわちカオスの支配する空間との接触をはかり、その力によって再活性化し、特別な力を獲得するために境界の向こう側の空間と交信する機能を与えられてもいるのである。

5. 都市というものは、他者、自然、超自然との境界を明確化し、カオスを排除して作り上げたコスモスでありつつ、他方でコスモスを壊しかねないカオスの力を取り込むことを必要とするという、基本的に相反する二つの性格を持つ。こうして都市には、開いては閉じる弁に相当する装置が必要となるのであり、それゆえに橋には水上、水中で生きられないヒトという動物が与えた単なる交通機能を超えた、意味的機能ともいうべき機能が与えられていることとなる。

結びつつ切り離すという橋の相反する性格は、連帯と対立、排除と導入という、まさに都市というもの、さらにはその都市というものを作り上げた人間というものの、二律背反の本質を反映したもののいうことができよう。

参考文献

- 荒俣宏, 1999, 『江戸の快楽』, 文藝春秋社
 浅野宏, 1999, 『江戸の「闇」を読む』, NTT 出版
 筑摩書房編, 1978, 『明治大正図誌』第1巻, 東京1, 筑摩書房
 筑摩書房編, 1978, 『明治大正図誌』第2巻, 東京2, 筑摩書房
 筑摩書房編, 1979, 『明治大正図誌』第3巻, 東京3, 筑摩書房
 原克, 2000, 『モノの都市論——20世紀をつくったテクノロジーの文化誌』, 大修館書店
 初田亨, 1994, 『東京 都市の明治』, 筑摩書房
 伊藤孝, 1989, 「隅田川の橋を探検する」, 『隅田川の歴史』, かのう書房
 陣内秀信, 1993, 『水の東京』ビジュアルブック江戸東京(5), 岩波書店
 鍋木清方, 1997, 『明治の東京』, 岩波書店
 神崎宣武, 1993, 『盛り場の民俗史』, 岩波書店
 河竹黙阿弥, 1984, 『三人吉三郎初買』, 新潮社
 小松和彦, 1988, 『異界が覗く市街図』, 青弓社
 栗本慎一郎, 1983, 『都市は、発狂する そして、ヒトはどこに行くのか』, 光文社
 三島由紀夫, 1996, 『憂国・橋尽くし』, 新潮社
 中村晃, 2005, 『完訳源平盛衰記』2, (巻十, 中宮御産事), 勉誠出版
 大石学, 2003, 『駅名で読む江戸・東京』, PHP 研究所
 大野拓史, 2002, 『月の燈影』(宝塚花組パウホール公演)
 齊藤月岑, 1928, 「東都歳時記」, 『東海道名所図会』下巻, 日本隨筆大成刊行会
 佐藤光房, 1988, 『東京落語地図』, 朝日新聞社
 司馬遼太郎, 1995, 『本所深川散歩, 神田界限』, 朝日新聞社
 サイデンスティッカー, エドワード・G., 1986, 『東京下町山の手』, 安西徹雄訳, TBS ブリタニカ
 鈴木理生, 2006, 『江戸の橋』, 三省堂
 高浜虚子, 1999, 『大東京繁盛記』, 毎日新聞社
 田中聡, 1999, 『伝説探訪東京妖怪地図』, 荒俣宏監修, 祥伝社
 上田篤, 1984, 『橋と日本人』, 岩波書店
 夢野久作, 1979, 「街頭から見た新東京の裏面」, 『東京人の墮落時代』, 葦書房